

ケース担当実習における実習指導Ⅱの学習効果の検討

—ケースレポート発表後のアンケート結果より—

宮堀 真澄¹⁾ 鈴木 圭子²⁾

Exploring the way of training guidance II in case charge training Through the questionnaire result after presentation of case report

Masumi MIYAHORI Keiko SUZUKI

要旨：介護福祉士養成教育における「実習指導」の科目は、実習のオリエンテーションから実習終了後の理論と実践の統合をはかるという様々な要素を含む。今回、介護福祉実習Ⅲ終了後の授業を「実習における介護実践を振り返り、介護観を深める。個別介護の問題解決における思考過程を学ぶ。理論と実践の統合をはかる。」ことを目標とし、担当ケースのグループ討議、事例発表、全体討議を行い、その学びから「自己のケースレポートをまとめる」という授業内容とした。この一連の学習過程より、自己の介護実践を客観視すること、多様なケースの個性に即した介護の原理原則を引き出し、また個々の現象を原理原則に帰納するという授業展開の一つとして有効であることが示唆された。

キーワード：介護福祉実習Ⅲ、実習指導Ⅱ、グループ討議、ケースレポート

Summary: The subject “training guidance” in care worker training education includes the various element that measures the integration of the theory and practice, and also the orientation of the training. This time, we had the classes with objects thinking about view of care looking back for training, thinking process in the problem solution of an individual care, and integration of the theory and practice. And we made the classes contents completing the case report of self the after do the group discussion, presentation of case report, the whole discussion of the charge case as that after care welfare training stage Ⅲ. Drawing the principle of the care that conformed it to the individual nature of a various case, to watch the care practice of self the object from, this series of study process and do it was suggested that it was effective as one of the lesson development that induces an individual phenomenon to the principle.

Key word: care welfare training stage Ⅲ, training guidance Ⅱ, group discussion, case report

I. はじめに

介護福祉士養成教育における「実習指導」および「介護福祉実習」では、社会福祉の主要な原則の一つである「個別化」つまり、「人間が生存していく時の人間らしさの追求であり、人が他の誰でもなく自分らしい生活を送り続けることができるようにするための追求」¹⁾と定義づけられる介護福祉実践において一人ひとりの利用者の個性に即した介護が提供できるよう利用者の個性への理解を学ばせることや、介護者としての思考過

程をふまえた働きかけができる力量を育てる教育をしていくことは重要な課題であると考えられる。

日本赤十字秋田短期大学（以下、本学とする）における介護福祉実習Ⅲ（最終段階実習）の目標の一つに「利用者個別のニーズを把握し、個性に応じて援助できる」を挙げている。この目標に対し「ケースレポートをまとめる」というのが到達目標である。過去2年間（第一期生・第二期生）のケースレポートの内容を検討した結果、介護過程の理解不足からか実習目標の到達度が低い学生

介護福祉学科 1) 講師 2) 助手

本文は、第8回介護福祉学会大会において発表したものに加筆したものである。

に対する指導の必要性や、自己の介護実践に対し客観的に評価する力に欠けるのではないか。あるいは、ケースレポートをまとめる際に介護過程に対し他者から評価を得ることで、自己の課題解決能力を養う必要性があるのではないかと考えた。

そこで今回、第三期生に介護福祉実習Ⅲ終了後の「実習指導Ⅱ」実習後の振り返り学習の授業において、各実習施設一事例に対しグループ討議を行い、事例発表会で全体討議をし、その学びから自己のケースレポートをまとめるという授業内容とした。この一連の学習過程より学生の学びを明らかにし、学習効果について考察したので報告する。

Ⅱ. 研究目的

介護福祉実習Ⅲ終了後、「実習指導Ⅱ」の事後指導において、担当ケースのグループ討議、事例発表、全体討議と一連の学習過程より学習効果について考察する。

Ⅲ. 研究方法

1. 授業計画

1) 実習指導Ⅱの事後指導における学習目標

(1) 実習における介護実践を振り返り、自己の介護に対する問題意識を明確にし、専門職としての介護観を深めることができる。

(2) 個別介護の問題解決における思考過程を学ぶとともに、理論と実践の統合をはかる。

2) 授業概要：「実習指導Ⅱ」授業時間数30時間中、介護福祉実習Ⅲ終了後の事後指導時間12時間。講義期間は平成11年11月～12月。

3) 授業展開方法

(1) 各実習施設より1事例選出。選出は学生間で自主的に決める。選出した事例の介護過程の展開についてグループ討議を行い、事例発表形式にまとめる。

他の学生の介護過程の展開から、自己の担当ケースの問題とかがかわらせて理解することができることをねらいとする。

(2) 実習報告会は、事例発表会とする。司会・書記は学生主体とし、各施設発表時間15分、質疑応答10分とする。1年次生も参加。最後に各実習施設担当教員よりスーパービジョンをうける。

他者から評価を得ることで、自己の介

護実践を客観視することができること。発表者の内容について自己の考えを述べることができることをねらいとする。

(3) 以上の学びより、自己の介護過程の振り返りを行い、ケースレポートをまとめる。まとめ方の様式は提示する。

発表と全体討議を通し、スーパービジョンを活用し介護過程をまとめることができることをねらいとする。

(4) 「自己の介護観」をレポート提出。

4) 介護福祉実習と実習指導Ⅰ・Ⅱとの関連

本学における介護福祉実習は3段階から構成されている。実習Ⅰ（1年次後期）は、人間的ふれあいを通し利用者を理解する。施設を生活の場としてとらえ利用者の生活概要を知ることが目標とし、2週間行う。実習Ⅱ（2年次前期）は、実習Ⅰをふまえ利用者の個別性に応じた介護実践を目標とし、受け持ち利用者の介護過程の展開を行う。期間は4週間。実習Ⅲ（2年次後期）は、介護過程の展開ができる。専門職として介護を支える価値観の形成である。

学内での学習と実習による体験を有機的に結合するための科目が「実習指導」である。

2. 対象：本学介護福祉学科第三期生

(2年次生) 55名

3. 調査方法

1) 事例発表終了後、趣旨を説明しアンケート用紙を配布、後日回収とした。調査内容は、以下の通りである。

(1) 発表のケースが担当ケースかグループメンバーのものか、また取り上げた理由

- (2) 1. グループ討議のまとめの時間の適性
2. グループ討議への参加状況
3. グループ討議の学び
4. まとめ方の評価
5. 発表体験からの学び
6. 学生・教員のコメントからの学び
7. ケース報告からの学び
8. 今後の介護計画への活用

(3) 1. 事例発表会への1年次生の参加をどう感じたか

2. 自由記載

(4) 参考文献の活用の仕方

(5) 介護福祉実習Ⅱ終了後のケースレポート

のまとめの活用状況

2) 集計・分析方法

調査内容(2) 1の項目は4段階評価、2の項目は3段階評価、3～8の項目は5段階評価とし項目ごとに単純集計した。

(1)の発表したケースが自分の受け持ち利用者だった群と、グループメンバーの受け持ち利用者だった群を、調査内容(2) 3～8の集計結果とクロス集計した。

3) アンケート調査結果を参考に「実習指導Ⅱ」事後指導の授業評価を行う。

IV. 結果および考察

1. 回収率は81.8%、有効回答率100%であった。
 2. 発表した事例が自分の担当ケースだった学生12名、グループメンバーのケースだった学生33名であった。選択の理由は、自分の担当ケースの場合、「多角的視点で検討してほしかったから」、「特殊なケースの為皆に紹介したかった」等である。グループメンバーのケースの場合は、「全員多くかかわりを持ったケースだったため意見を述べやすかったから」が一番多く、「良くかかわっていて接し方から学ぶことが多かった」といった理由が主であった。実習メンバー全員が多くかかわりを持っていたため利用者を良く把握しており、共通理解しやすい事例を選択したという理由だけでなく、利用者の個別性を理解しようと努力していく関係性のなかに良好な援助関係をつくることのできた要因を分析することにより、学ぼうとする姿勢が伺われる。

3. グループ討議の時間の適性 (図1)

「ちょうど良かった」60%、「もっと時間がほしかった」31.1%、「分からない」8.9%であった。平成12年度には、カリキュラムの改正もあり、「実習指導Ⅱ」の時間数30時間から60時間に増えることから、考慮できると思われるが、ただ単に時間数多い少ないの問題だけではなく、教員のかかわりのあり方も検討していかなければならない課題であろう。授業担当教員一人では限りがあるため、他の教員の協力も得ながら学生の力を引き出していくことが必要と考える。

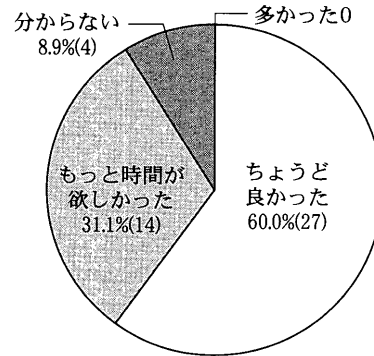


図1 グループ討議の時間の適性 (N=45)
単位：%(人)

4. グループ討議への参加状況 (図2)

「できた」82.2%、「どちらともいえない」17.8%、であった。時期的なことも考え合わせると、ゼミ等を通しかなりグループ討議にも慣れてきているためか、議論の過程において相手の意見を聞けること、自分の意見を言えること等の態度が養われてきていると評価して良いのではと考える。このことから学生は自主的、主体的に取り組んだ姿勢が伺われる。

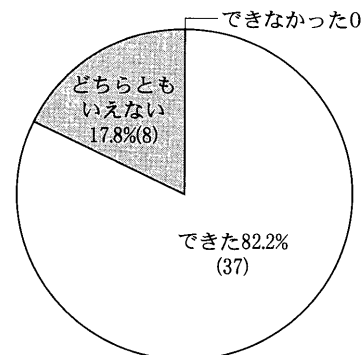


図2 グループ討議への参加状況 (N=45)
単位：%(人)

5. グループ討議の学び (図3)

「かなり思う」44.4%、「少し思う」51.1%であった。「どちらともいえない」4.4%であった。ほとんどの学生が学びとなったようである。自由記載のなかにも「内容は難しかったが深く考える場がもてた」「グループ討議では納得できるものができた」等の感想が書かれていた。介護にいたる過程、実践、その結果を生み出した要因を検討していく過程において、自分の対象把握や理解のしかたの視点とは違った見方考え方、見る観点の多

様性等を知り、共通理解していく過程、あるいはその関わりから、さらには自分の介護関係の構築の課題を問い返す機会となったと思われる。

6. まとめ方の評価 (図3)

「かなり思う」24.4%、「少し思う」48.9%、「どちらともいえない」24.4%、「あまり思わない」2.2%であった。学生自身の満足度は高い結果となったが、それまでの過程を重視してのことと思う。しかし、その間幾度も指導を要するところもあり表現力のなさは、思考力の無さでもあり、今後も指導のあり方等検討を要する課題の一つでもある。

7. 発表体験からの学び (図3)

「かなり思う」48.9%、「少し思う」46.7%、「どちらともいえない」2.2%、無記入2.2%であった。自由記載には、「第三者に伝えることの難しさ、大切さを知った」と感想が書かれていた。学生間の質疑応答も活発なものとなった。発表のなかでまた新たに気づかされたことも多かったと思われる。

8. 学生や教員のコメントからの学び (図3)

「かなり思う」53.3%、「少し思う」37.8%、「どちらともいえない」8.9%であった。自分たちの討議には出なかった視点や発想の違い等学ぶべき点が多かったようである。また、教員サイドも発問のしかた等力量が問われ、新たな研鑽の必要性を感じたらしいである。

9. ケース報告からの学び (図3)

「かなり思う」75.6%、「少し思う」22.2%、「どちらともいえない」2.2%であった。自由記載には「様々な事例より学ぶ点多かった」「様々な視点から捉えることができた」「報告会はとても大切、2年になって大切さがわかった」等を挙げていた。他の実習施設のメンバーは、どのような関わり方、展開をしたのか、幾分たりともお互い研鑽の場になったのではないだろうか。

10. 今後の介護計画への活用 (図3)

「かなり思う」71.1%、「少し思う」22.2%、「どちらともいえない」4.4%、無記入2.2%であった。自由記載には「就職してからも役立つ」と挙げていた。ほぼ9割方まとめの参考になったようである。

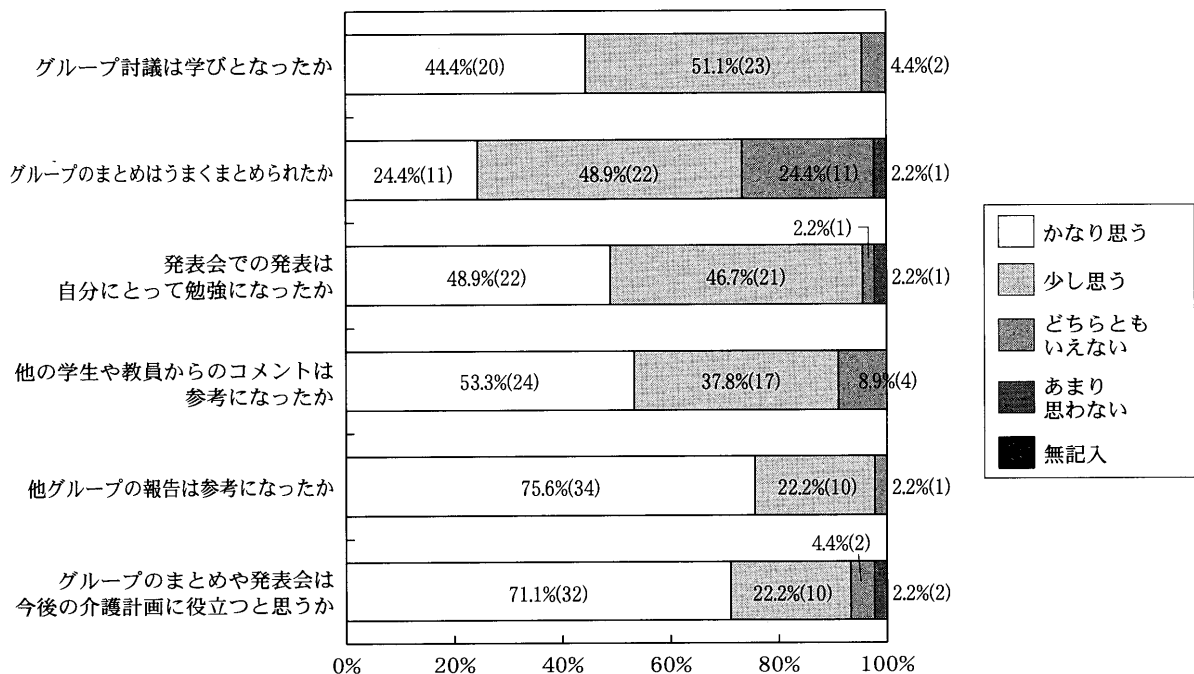


図3 グループのまとめと発表(N=45) 単位：%(人)

11. 事例発表会への1年次生の参加をどう感じたか

「何かしら感じ取ってくれたら嬉しい」、「今後の実習に役立てて欲しい」、「いつもと違った緊張感を持った」「張り合いがあった」等、有意義な試みと評価していた。自由記載では、「実習Ⅱ期からケース報告とした方がよい」等、様々な意見が出されていた。1年次生も報告会を控え「自分たちもあのようになれるだろうか」等、感想が述べられていた。教員の協力もあり、今回初めて実現できたわけだが、時間割等の調整を行い今後も続けていきたいと考えている。

12. 参考文献の活用の仕方

卒業生のケースレポート集が主であった。実際、事例研究が載っている参考文献や、学生対象の介護過程の文献の少なさを日頃から感じているところである。本学では2年次前期に総合科目で研究の視点、考察能力に関する講義を実施しているのだが、まとめる際の文献の活用方等指導が必要と示唆された。

13. 介護福祉実習Ⅱ終了後のケースレポートのまとめの活用の仕方 (図4)

「参考になった」64.4%、「部分的に参考になった」15.6%、「参考にならなかった」8.9%、無記入11.1%であった。今回、介護福祉実習Ⅱ段階終了時にケースレポートのまとめを行ってみた。初めてのケース担当実習だったため実習前の不安も高かったようである。受け持ち利用者を決めた時期、カンファレンスの持ち方、かかわりの時間、記録の時間の持ち方等、各実習施設に格差があることもあり到達度が様々であった。十分展開できなかった状況より、再度利用者の情報を活用し、必要な情報の理解や分析の視点、具体的援助内容等アセスメントを充分おこなったうえで計画立案を再度行う目的で介護過程の振り返りの時間を設けた。この時期の学生は利用者の目に見える言動には気がつくが、全体像まではなかなか捉えられていない現状である。「実習Ⅱ段階の時は大変だったが、反省点が次に活かされた」等の意見が多く、効果的であったと考える。

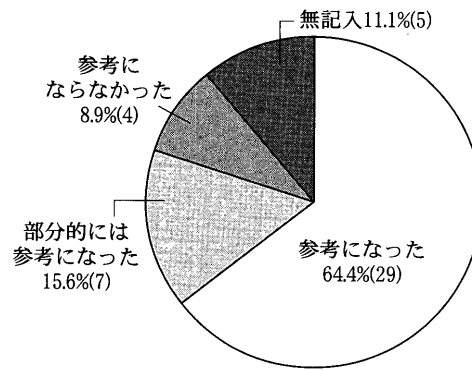


図4 実習Ⅱ終了後のケースレポートのまとめの活用の仕方(N=45) 単位：%(人)

14. 検討事例が自分のケースだった群と、グループメンバーのケースだった学生との学びの比較 (表1)

学びの差はみられなかった。自分のケースだった学生にとっては、自己の介護実践を振り返り、他者から評価を得ることで客観性が養われ、自己の介護観も深まったと思われる。グループメンバーのケースの場合も同様のことがいえる。グループ討議の学習効果が得られたと示唆される。

表1 検討事例が自分のケースだった群と、グループメンバーのケースだった群との学びの比較

	グループ討議は学びとなったか			単位：人	
	かなり思う	少しは思う	どちらともいえない		
自分のケースだった学生(N=12)	4	7	1	$\chi^2=1.178$ p=0.554 ns	
グループメンバーのケースだった学生(N=33)	16	16	1		
	発表は勉強になったか				
	かなり思う	少しは思う	どちらともいえない	無記入	
自分のケースだった学生(N=12)	5	7	0	0	$\chi^2=1.379$ p=0.710 ns
グループメンバーのケースだった学生(N=33)	17	14	1	1	
	他の学生や教員からのコメントは参考になったか			単位：人	
	かなり思う	少しは思う	どちらともいえない		
自分のケースだった学生(N=12)	7	4	1	$\chi^2=0.168$ p=0.919 ns	
グループメンバーのケースだった学生(N=33)	17	13	3		
	今後の介護計画に役に立つと思うか				
	かなり思う	少しは思う	どちらともいえない	無記入	
自分のケースだった学生(N=12)	8	4	0	0	$\chi^2=2.045$ p=0.563 ns
グループメンバーのケースだった学生(N=33)	24	6	2	1	

V. まとめ

今回は、介護福祉実習Ⅲ終了後の「実習指導Ⅱ」の事後指導に焦点をあて学習効果の考察を行った。実習後の学習において、自分の介護の主観的な見方を自覚し、理論的な根拠に基づき対象を正しく把握する必要性等の気づきを介護観のレポートで述べていた学生もいた。多様なケースの個別性に即した介護の原理原則を引き出し、また個々の現象を原理原則に帰納するという授業展開の一つの方法として有効であったと考える。限られた時間内でグループ討議や全体討議の場でのスーパービジョンが活かされ、効果的な学習成果が期待できたと考える。また、実習という生きた体験を通し学んだことを振り返り、次の課題を見いだしていく。このような学習は学生が自己の介護に対する問題意識を明確にしていくためのものであり、専門職としての介護観を確立していく過程でもある。このことがひいては利用者の個別に応じた介護計画援助の実際に活かされて行くのであり自己覚知という意味においても有効と考える。

介護実習指導Ⅱは今年度よりカリキュラムの改正が行われ、60時間に増加される。ただ単に時間数の問題ではなく、いかに「介護実習指導」と「介護福祉実習」をうまく連動させるか課題の一つといえる。また、訪問介護実習も新たに開始されることとなり、体験を共有化し学習効果を高める指導が必要と考える。

実習指導は、実習のオリエンテーションから実習終了後のスーパービジョンという様々な要素を含む教科内容である。介護を科学として捉え実践していく能力を育成していくためには授業内容のどこに焦点をあてるのか、そして実習時の指導方法、実習施設の協力、及び指導者との連携等学習効果を上げるためには、具体的にどのような指導方法がより良い効果が得られるのか実習指導の方法論の考察が求められてきている。今後も検討していきたいと考える。

引用文献

- 1) 坪山孝：「介護とは」, 岡本民夫他編「介護概論」, 川島書店, pp22, 1989.

参考文献

- 1) 西尾孝司：ケアスタディを取り入れた実習教育の成果と課題, 介護福祉教育, 第4巻第1号, pp5-47, 1999.

- 2) 西村洋子編：最新介護福祉全集⑭介護概論, メヂカルフレンド社, 2000.
- 3) 福祉士養成講座編集委員会：三訂介護福祉士養成講座介護概論, 中央法規出版, 2000
- 4) 福富昌城, 黒沢エミ子, 岡本房子：個別介護計画をすすめる実習指導方法に関する考察, 介護福祉学, Vol. 3, No. 1, pp96-100, 1996.
- 5) 横山正博：ケース担当実習の展開と実習指導の課題, 介護福祉学, Vol. 4, No.1, pp62-68, 1997.